

論文

地理学巡検におけるジオパーク活用の教育的意義

—室戸ジオパークの実践—

The Pedagogical Implication of Geography Excursions using a Geopark: A Practical Approach toward Muroto Geopark

中村 努 (高知大学教育学部)

NAKAMURA Tsutomu

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

This article discusses the implications of teaching geography using a geopark. Two aspects are identified for the consideration of the pedagogical implication of geography excursions using a geopark. The first aspect is whether the educational value is delivered in the right manner in the geopark. The value is developed by comparing the educational value of the geopark with the actual excursion course and the contents explained during the course. The second is whether an opportunity to rethink the future of the region including the geopark is provided.

This article introduces the excursion to Muroto Geopark as an example of a practical approach to university geography education in July 2014. The results were as follows: Muroto Geopark imparts education on geology, the environment, and disaster prevention. All three pedagogical implications were incorporated into the excursion course adequately, and our guide explained the contents of the excursion course. In addition, the thoughts and behaviors of the stakeholders concerning the promotion of the Geopark was revealed up to a certain extent. Because each stakeholder has an ulterior motive, certain stakeholders had the different idea of the Muroto Geopark, and did not actively participate in its promotion.

The way to perceive regions based on the academic knowledge of the guide provided us an opportunity to consider the nature of regions from various viewpoints. Thus, the excursion is to be highly evaluated in university geography education.

1. はじめに

本稿は、地理学教育におけるジオパーク活用の意義を論じるものである。本稿の問題意識を明確にするため、ジオパークをめぐる論点と、地理学教育における巡検の意義づけを先行研究から整理しておきたい。

価値のある地学的遺産 (geoheritage) を保全し、それを活用して地域の持続可能な発展を目指すジオパークの考え方は、1997年にユネスコ生態・地球科学部が中心となって提唱したことに始まる (目代, 2014)。2004年に設立された世界ジオパークネットワークは、ユネスコの支援を受けて、世界ジオパークの認定を行っている。同組織によるジオパークの定義として、①地域の地史や地質現象がよくわかる地質遺産を多数含むだけでなく、考古学的・生態学的もしくは文化的な価値のあるサイトも含む、明瞭に境界を定められた地域である、②公的機関・地域社会ならびに民間団体によるしっかりした運営組織と運営・財政計画を持つ、③ジオツーリズムなどを通じて、地域の持続可能な社会・経済発展を育成する、④博物館、自然観察路、ガイド付きツアーなどにより、地球科学や環境問題に関する教育・普及活動を行う、⑤それぞれの地域の伝統と法に基づき地質遺産を確実に保護する、⑥世界的ネットワークの一員として、相互に情報交換を行い、会議に参加し、ネットワークを積極的に活性化させる、の6点を定めている (深見, 2010)。とりわけ、ジオパークの定義には、地元住民による保全、環境保護や環境教育への寄与、ツーリズムを通じた地域経済の持続的な発展、が含まれる (Eder and Patzak, 2004)。

2014年9月現在、111地域が世界ジオパークに加盟している (European Geoparks Network, 2014)。欧州と中国がその対象地域の大部分を占め、日本からは7地域が認定されている。本稿が対象とする室戸ジオパークは、そうした地域の1つである。世界ジオパークの認定には、事実上、日本ジオパーク委員会から日本ジオパークに認定されなければならない (深見, 2010)。2014年9月現在、7つの世界ジオパークを含む36地域が日本ジオパークに認定されている。

以上の特徴を踏まえ、ジオパークに関する先行研究は、主としてジオパークの候補地域におけるジオパーク認定の可能性あるいは運営上の課題 (小山ほか, 2011; 村越ほか, 2012; 深見・大久保, 2014) や、ジオパーク認定後のマネジメントあるいは教育効果 (川村, 2014) を検証してきた。こうした研究では、ジオパークの推進を前提とした実践の事例および政策論が展開される。最近では、2014年の『E-Journal GEO』9-1で特集「日本のジオパークの現状と課題」が組まれた。「はじめに」で述べられているように、ジオパークの活動に対する研究者の貢献の一つは、関連する情報を整理、分析し、ジオパー

クの活動に役立つ議論を積み上げていくことであるとす (目代, 2014)。当然、個々の研究者は、主に当該ジオパーク (あるいはジオパークに向けた取り組み) を推進する立場をとっている。そのため、ジオパークの理念と比較した現実の活動の妥当性を批判的に検討したり、そもそもジオパークが地域の目指すべき方向性としてふさわしい活動たり得ているか検証したりする研究はみられない。

こうした傾向は、地域活性化やまちづくりに関連した研究にも少なからずみられる。すなわち、ジオパークに限らず、あらゆる運動には、その実施プロセスにおいて複雑な利害調整を伴う。先進事例の成功 (とされる) 要因の解明は、地域の態様のうち、ロジックがもっとも明快にみえる一部分を切り取って解釈したものに過ぎない。荒木 (2012) がいみじくも指摘するごとく、それらの運動の陰に繰り広げられる、政治的な動き、地域の集団や組織間の葛藤や確執、そうしたものについての言及はほとんどない。その背景には、運動を推進する当事者であるという個々の研究者の立場上、地域のあり方を論じるうえでの中立性、客観性が担保しにくいことがあると推測される。

ところで、筆者は本学教員養成課程の地理学関連の科目を担当している。受講生のなかには、将来教員になることを想定して、地理教育に関心をもつものが少なからず存在する。本学においては、座学で行われる講義のほか、2回生以上が履修できる、地理学演習、地誌学演習において巡検の機会がある。地理学の研究の多くが、事例とする現場を実際に訪問し、当事者にヒアリングをすることを通じて、地域のあり方を考察するという実証主義に基づいている。そのため、巡検の実施は、卒業論文を執筆する前段として、地理学的な思考法や調査法を学ぶ機会になる。また、卒業後、小中高校教員として、地域に関する単なる事実の羅列や、知識の詰め込みではない、地理学的なものの見方を踏まえた指導法に生かされることが期待される。

以上の巡検における地理学教育上の意義に鑑みて、地理学巡検において、ジオパークを活用することの教育的意義を検討するうえでの課題として、以下の2点が指摘できる。一つはジオパークが掲げる教育的価値が現場において十分に伝えられたかである。そのためには、ジオパークの理念に照らした教育的価値を示したうえで、実際の巡検コースと説明の内容が検討されなければならない。もう一つはジオパークの取り組みを含めた、地域のあり方を再考する機会が提供されたかどうかである。それは必ずしも推進者の立場のみに焦点を当てたものではない。むしろ、個々の利害関係者がジオパークの定義する生態学的価値、文化的価値をどのように評価し、全体

としての地域のあり方を規定しているのかまで射程に入れている。巡検は、現場において、そうした複眼的な視角から地域をとらえることの重要性を学習できる、地理学教育の機会の一つとして位置付けられる。

本稿は、筆者が 2014 年 7 月、速藤尚助教とともに担当した、地理学演習における「室戸ジオパーク巡検」を地理学教育の実践例として紹介することで、上記の課題にこたえようとするものである。地理学演習は主として 2 回生が受講しており、大学入学後に受講する講義のなかで初めて巡検に出かける貴重な機会である。そのため、地理学演習で設定された巡検を取り上げることは、地理学教育における巡検の教育的意義を検証するうえで最適である。本稿では、受講生へのアンケートによらず、ジオパークガイドの順路設定と各ジオサイト（見学場所）における説明から、ジオパークの価値がいかに伝えられたかを検証することで、ジオパークの教育的意義について考察したい。

II. 室戸ジオパークの概要

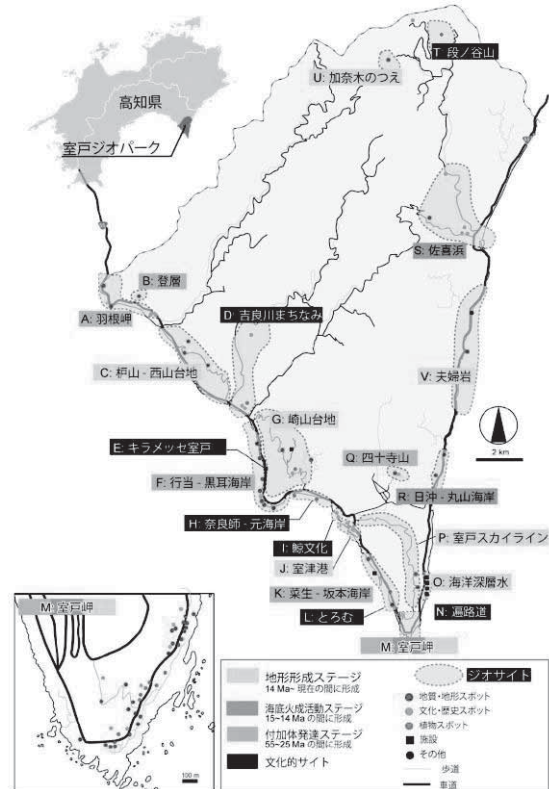
室戸ジオパークは、高知県東部の室戸半島に位置し、室戸市全域を範囲としている。室戸ジオパークの魅力として、22カ所設定されているジオサイトを通じて、海洋プレートの動きによって大地が新しく誕生する様子、隆起によって形成された大地の上で営まれてきた人々の暮らし、それらの関係性を学ぶことができる（柚洞，2011）（第1図）。

その教育的価値について、室戸ジオパーク推進協議会（2010）は、子どもへの地学教育や環境教育および住民への防災教育の意義を挙げている。より具体的には、①災害の発生過程や発生メカニズムを正しく理解することで、被害を最小限にとどめることが可能となること、②地球科学だけでなく、自然科学の研究や教育にかかわる人材、国際的な感覚を持つ人材、コミュニケーション能力の高い人材、地元の経済の持続的な発展に貢献できる人材などを育成できること、③ジオパークにかかわる多くの人々から、将来の職業をはじめとする自らの生き方について学びとることができること、④物事をさまざまな角度から調べ、原因を追究し、結論を導く能力を高めることができること、を挙げている（室戸ジオパーク推進協議会，2010）。

特に防災教育における室戸ジオパークの価値について、室戸ジオパーク推進協議会（2010）は、ジオパーク候補地の自然地理学ならびに人文地理学上の特徴を示した項目において、「室戸ジオパークは、プレートの沈み込み帯における付加作用の科学的な教材のみならず、地震・津波・台風に対する防災の世界的なモデルケースになることが期待できる」と記している。このように、室戸ジオ

パークはその自然災害の大きさと発生頻度の高さから、災害を最小限にとどめようとする、住民の知恵が伝統的な家屋や生活様式にも反映されているという。

次章では、上記の室戸ジオパークにおける教育的価値が巡検においてどのように伝えられたかを、実際の巡検コースと各ジオサイトにおける解説から検討する。



第1図 室戸ジオパークのジオサイトマップ

資料：室戸ジオパーク推進協議会（2010）

III. 巡検の内容

1. 巡検当日までの経緯

地理学演習は、地域をキーワードとしたカリキュラムとしてすでに開講されている地域関連科目の一つである。地域関連科目は、文部科学省「地（知）の拠点整備事業（COC）」に採択された「高知大学インサイド・コミュニティ・システム（KICS）化事業」の掲げる人材育成目標を達成するために、高知県の事象を教材として具体的に取り扱った内容を含む授業科目のことである。このことから、高知県に位置する室戸ジオパークを地理学演習の巡検先として選定することは、上記の授業科目の目的との整合性が高いと判断した。

巡検の準備として、講義 2 回分を室戸ジオパークの地質に関する書籍の輪読にあてた。高知県の地質を解説した鈴木・吉倉編（2012）のうち、室戸ジオパークや地質上の特質がよく理解できる章（1～3 章および 7, 8 章）を取り上げることにした。各受講生が 1 章ずつの要約を

担当し、その内容を発表した。

巡検の実施にあたっては、地理学演習を受講していた2回生のみならず、巡検の機会が少ない3、4回生にも参加を促した。その結果、2回生2人、3回生5人、4回生3人に教員2名を加えた計12名が巡検に参加することになった。いずれの参加学生も、地理学のゼミナールに所属している。特に、3回生は今後、卒業論文のテーマを選定していく時期にあたり、参加者のなかにはジオパークを事例候補の一つに考えている学生がみられた。このことから、ジオパークの現場を実際に訪れることで、卒業論文のテーマを設定する機会の一つとして活用することも想定して、ゼミ学生全員に対して参加を促した。

巡検コースに与える影響が大きかったのは、当日のみの巡検であることによる時間的制約に加えて、現地の往復の交通手段の確保であった。現地に向かうのに時間距離が短く、かつ移動の自由度が高い交通手段は、マイクロバスの公用車であった。しかし、利用希望日時には、すでに別団体による利用予約が入っていたため、予約可能な公用車（普通車）を加えて、参加学生個人の自家用車およびレンタカーに依存せざるを得なかった。当日のレンタカーは午前8時より利用可能であったため、現地集合時刻は午前10時以降になることが見込まれた。一方、担当ガイド（柚洞一央氏：室戸ジオパーク推進協議会の地理専門員）の都合上、午前10時から1時間程度は、別の団体を案内する予約が入っていたため、午前11時に現地の室戸ジオパークビジターセンターに集合することになった。巡検の終了時刻に関しても、往路にかかる時間を考慮して、午後3時過ぎに終了できるようガイドに依頼した。

巡検のコースは、基本的にガイドに一任した。その結果、事前に、国立室戸青少年自然の家による室戸岬周辺の自然観察とミニ航海を楽しむミニクルーズに15名の空きがあるとの案内を受けた。所要時間は1時間から1時間半で出航は午後1時半とのことであった。こうしたクルーズによって、海上から海岸段丘など室戸岬特有の地形を観察できることが期待された。しかし、船酔いのリスクが高いことと、陸上の見学コースが制約されることが想定された。そのため、今回は海上からの観察は見送り、陸上におけるコースに限定した巡検を依頼することにした。巡検のコースおよび訪問の場所は、ガイドに一任されており、当日までその詳細は不明であった。

こうしたタイトなスケジュールのなかで、ガイドに巡検コースを依頼したことをあらかじめ指摘しておく。

2. 室戸ジオパークの概要説明

巡検実施日は2014年7月21日（月曜日）の海の日であった。室戸市内の天候は晴れ、最高気温は29度であっ

た。最初に道の駅キラメッセ室戸にある室戸ジオパークビジターセンターに集合して、午前11時半から、室戸ジオパークの概要説明を受けた（写真1）。



写真1 室戸ジオパークビジターセンターにおける
室戸ジオパークの概要説明

資料：筆者撮影（2014年7月21日）

まず、ジオパークの活動概要についてスライドを用いながら説明を受けた。ジオパークに一度認定されると、関係者の活動が4年ごとに再認定のために審査されるという、ジオパークの審査、認定のプロセスが説明された。次に、最近の室戸ジオパークの活動の一端が示された。室戸ジオパークのロゴは宣伝活動に使用されるとともに、付加体（砂岩泥岩互層）ケーキや郵便局の夏制服などが、関連商品の販売例として紹介された。また、教育普及活動として、住民による自主勉強会や小学生を対象にしたジオツアー、高校生を対象にしたむろと光サービスなどの取り組みが紹介された。さらに、高知県立室戸高等学校は2011年度以降、ジオパーク学を「選択科目」として採用したという。ジオパーク学は、室戸の地質に加え、歴史、観光と産業などについても学習し、週2時間の選択制となっている。座学だけでなく、現地での地学巡検や海洋深層水研究所の見学、室戸三山巡りが実施されている（高知県立室戸高等学校ウェブサイト）。これによって、高知県庁内に部局ができ、教育委員会を通じて室戸ジオパークの推進員が講演して回ったり、野外実習を受け入れたりするきっかけができたという。

上記の取り組みがみられるのは、ジオパークの地質学的な価値に加え、住民の積極的な参加態度がジオパークとして評価対象になることによる。近年では地域住民が主体となって、ジオツーリズム（おさんぼツアー）を構築している。住民でつくるジオツーリズム推進チームがおさんぼツアーと銘打ち、テーマを絞って同市観光を紹介する。2013年11月に開催された初回のテーマは室戸の魚で、参加者は椎名漁港で定置網漁の水揚げを見学し

た後、捕れたてのアジやカマスを刺し身、空揚げなどで味わった（高知新聞、2013年11月11日付）。こうした漁師飯は住民によって調理された。

現在、2015年春の開設を目指して、室戸ジオパークの新たな拠点施設「室戸世界ジオパークセンター（仮称）」の整備が進んでいる（柚洞、2014）。廃校になった旧室戸東中学校の建物が活用されている。博物館と公民館の特長を併せ持った施設との位置づけで、室戸ジオパークの巡り方を知ることができる場にするという。

最後に、ジオパークの普及活動について、日本ジオパーク全国大会では首長セッションを設けることで、行政の首長がジオパークを学ぶ機会をつくっていることや、JICAの研修プログラムでアフリカから来客があったことが紹介された。室戸ジオパークは、世界ジオパークに認定される以前、地質上の特徴のみを強調しすぎたために過去2回落選している。ガイドからは、地球・自然の仕組みを知るなかでわれわれがどう生きるべきか、持続可能な発展（sustainable development）とは具体的に何を指すのかを考えてほしいとのメッセージが伝えられた。

3. 室戸ジオパークの地質

続いて、正午より室戸ジオパークビジターセンター内に展示されている、3Dメガネを使った立体海底地形図を実際に見ながら、室戸の地質的特徴とその成因について解説を受けた。こうした解説は、その後の巡検コースで実際に訪問して確かめるための事前学習にあたる。海溝の水深は4,800mで、太平洋プレートは年間4cm動く。その証拠は陸上で確認できる。その一つ、縞模様の岩石（タービダイト）は、高い温度と圧力によって、水が2000万年かけてのぞかれつつ、砂泥が交互に固まってできている。

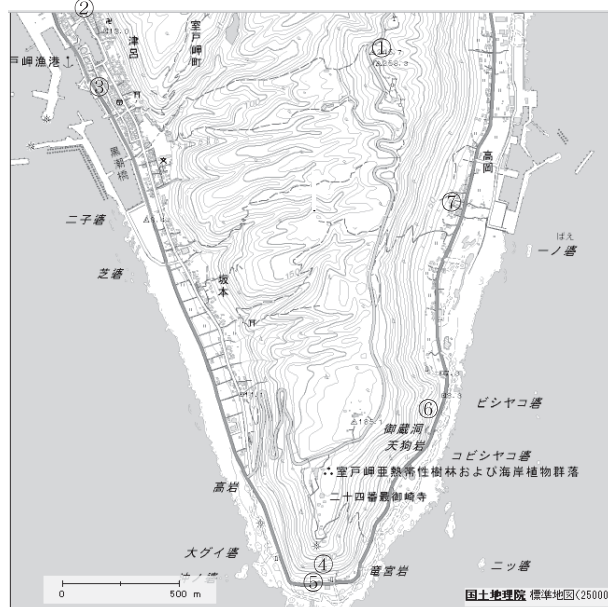
また、エキジョッカー（地盤液状化現象実験ボトル）を用いて、砂と泥の沈殿速度の違いが確かめられた。さらに、当時の海底の模様が出る付加体の存在が解説された。室戸は世界で初めて付加体の存在が確認された場所である。中央構造線より南側はすべて付加体によって構成されている。

標高200mの海成段丘は、10万年前に形成されたものであるという。吉良川町の山側にある上町地区と海岸沿いの下町地区においても、段丘が細かく分かれていて、形成年代がそれぞれ異なるという。

4. 室戸ジオパークの地質

午後は昼食を兼ねて、室戸岬展望台で食事をしながら、室戸岬に関する説明を受けた。団体客が短い時間で人数分の魚料理をすぐに用意できる店舗に限られたため、昼食は近隣のスーパーで刺身や総菜などを調達することに

した。地元住民が利用するスーパーの鮮魚コーナーは、地元で獲れた魚種を知るには格好の教材である。たとえば、購入した刺身のうち、金目鯛は室戸では漁獲高が少ないために高級魚として知られていることが伝えられた。以下、第2図中の番号順に訪問した各ジオサイトに沿って、訪問時刻とともに解説の内容を紹介する。



第2図 室戸ジオパーク巡検コース

資料：国土地理院『地理院地図（電子国土WEB）』（<http://portal.cyberjapan.jp/>）より作成。

①13:50 室戸スカイライン展望台津呂山



写真2 室戸岬展望台における東海岸方面の解説
資料：筆者撮影（2014年7月21日）

展望台から東西両海岸を眺めることができる（写真2）。定置網の説明とともに、集落は講によって漁業から得られる利益を分配する一方、リスクは分散していることが説明された。

②14:20 昭和九年室戸台風海嘯（かいしょう）襲来地点



写真3 津呂港における昭和九年室戸台風海嘯襲来地点
資料：筆者撮影（2014年7月21日）

1934年の室戸台風で高波が押し寄せた地点に石碑が立てられている(写真3)。石碑に刻まれた室戸岬町とは、合併以前の旧室戸岬町で、1959年に室戸岬町が周辺町村と合併し室戸市になった。当時の現地住民は、津波や地震よりも台風による高潮の方が怖がったという。津呂港は昭和大地震で隆起した土地を掘り返す、掘り込み港として利用し続けた。

捕鯨、遠洋マグロ、金目鯛と儲かる魚をシフトしていたが、近年の金目鯛の漁獲高は減少しているという。遠洋マグロの船を扱う建物が立地していたが、建物の老朽化と、200カイリ問題をきっかけとする相次ぐ遠洋マグロ船の減船で閉鎖されたという。

③14:35 津呂港（室戸岬漁港）



写真4 津呂港における漁船群
資料：筆者撮影（2014年7月21日）

津呂港に停泊しているのは、宝石サンゴを採る漁船であり、地域住民の話によると、土佐清水とともにサンゴ漁で利益を出したという(写真4)。入札は年に1回高知

で開かれる。近年は赤サンゴの原木価格が中国人による需要急増により高騰しているという。

④14:50 室戸岬：中岡慎太郎像前 ⑤15:10 灌頂ヶ浜



写真5 室戸岬における地質的特徴の解説
資料：筆者撮影（2014年7月21日）

中岡慎太郎銅像の土台の岩盤は、斑禰岩から成っていて、南海地震により隆起した証拠の一つである。粒の粗い石はゆっくり冷えて固まった斑禰岩である。室戸ジオパークインフォメーションセンターで一時休憩した後、遊歩道を通って灌頂ヶ浜まで歩いた。ここでは、リップルマーク（水の流れによる模様）、海底跡（生痕化石）、液状化の跡など実際の地形を確認しながら、それぞれの地質的特徴が解説された(写真5)。また、遊歩道の途中に、ウバメガシが生育している。ウバメガシは備長炭にできるほど硬く、吉良川では廻船問屋がウバメガシを使った土佐備長炭を製炭して栄えたという。

⑥15:30 御厨人窟



写真6 御厨人窟（左）（右は難行を積んだ神明窟）
資料：筆者撮影（2014年7月21日）

空海が居住したと伝えられる御厨人窟は、波の力によってつくられた海食洞である（写真 6）。洞窟内にある五所神社から洞窟外を眺めても、海岸までは少し距離があるために海岸線は見る事ができない。しかしながら、空海の生きた時代の 1200 年前は洞窟のすぐ傍まで波打ち際が寄せていたことが説明された。こうした解説も室戸岬が南海地震によって、隆起を続けてきたことを示すエピソードの一つである。さらに、地域住民の中には、室戸のまちづくりに札所が大きくかかわっていると主張する人々もいるという。

⑦15:50 室戸市高岡集落



写真 7 室戸市高岡集落における民家の高い塀
資料：筆者撮影（2014 年 7 月 21 日）

高岡集落の民家において、コンクリート塀が高いのは台風によって家屋の損傷を防ぐためである（写真 7）。さらに、瓦を定置網で固定することで、台風などの強風で飛ばされないようにしている。最近では釘で瓦を直接打ち付けているために台風で飛ばされることは少ない。室戸岬の東西で波の高さが異なり、高岡集落では、北西の風はそれほど強くないという。高岡集落は天草生産で有名で、韓国の済州島から海女を呼び寄せて生産増大に努めたという。解説の途中、偶然、高岡集落の住民から、家屋から実際の天草を見せていただくとともに、話を伺うことができた。

IV. 考察

本章では、I で示した、ジオパークを活用することの教育的意義を検討するうえでの 2 つの課題を検討したい。一つはジオパークが掲げる教育的価値が現場において十分に伝えられたかである。結論から言えば、室戸ジオパークが掲げる、地学教育や環境教育および防災教育の意義のいずれにおいても、ガイドによって適切に巡検コースに組み込まれ、かつその内容が伝えられていた。

地学教育上の工夫としては、最初に室戸岬展望台で説明を受けることで、高所から室戸岬の海成段丘をはじめとする地形を俯瞰することができた。その後実際に地質を直接見ることで、より詳細な南海地震による隆起の痕跡を確認することができた。こうしたさまざまなスケールから、同じ事象を検討することは、地理学的なものの見方を養うことにもつながる。

防災教育に関して、台風の常襲地である高岡集落の住民が、高い塀を築いたり、定置網で瓦を固定したりするなど、少しでも台風の被害を軽減しようとの工夫が集落の景観として見出すことができた。

さらに、室戸ジオパークビジターセンターで紹介されたように、室戸ジオパーク協議会による教育活動についても知る機会を得た。これらは、参加学生にとって、将来社会科教員として地域学習を実施する際、ジオパークのような取り組みを生かすうえで参考になりうる。

もう一つのより重要な検討課題は、ジオパークの取り組みを含めた、地域のあり方を再考する機会が提供されたかどうかである。この課題を検討するためには、ジオパークの推進をめぐる利害関係者の考えや行動がある程度明らかにされなければならない。実際の巡検において、室戸ジオパークの推進に関して、個々の利害関係者によるさまざまな意見が存在することが明らかになった。こうした情報は、ジオパークの推進活動をめぐって繰り返されるため、ジオツーリズムそのものの内容によっては詳らかにされることはない。しかし、文化地理学において、ある場所や景観が、どのようにして意味やイメージを付与され、商品化され、消費されるかを丹念に調べることが、重要なアプローチの一つとなっている（森, 2001）。

こうしたジオパークをめぐる複雑な諸相について、考える機会があったことは、参加学生の意識にも少なからぬ影響を与えたと考えられる。事実、卒業論文の対象地域として、同地域を候補の一つとして挙げたり、もっとも印象に残る内容として指摘したりする学生がみられた。実際に訪れた現場において、地理学的な手法によって分析可能なテーマが少なくないことを理解できたという点において、地理学教育における巡検の意義は大きかったといえる。

以上、ジオパークの取り組みにおいて、ジオツーリズムを展開するうえで意義が大きいと判断された情報の発信を通じて、ある場所や景観の意味やイメージが形成されてきたことが、巡検によってある程度明らかになったといえよう。確かに、東日本大震災や福島第一原発事故をきっかけに流行の兆しがあるダークツーリズムは、地域の観光振興にとって従来、ネガティブに捉えられてきた側面をむしろ積極的にアピールすることで、観光客誘

致の手段とするものである（鈴木，2014）。しかし、これとてツーリズムの枠組みにおいて語られる点では、従来のツーリズムの議論となら変わらない。すなわち、従来は積極的に語られなかった地域のコンテンツにあえて脚光を当て、観光客の感情に訴えるストーリーを切り取って見せることで、体験を商品化するという手法は従来のツーリズムと共通している。問われるべきは、コンテンツの内容よりもむしろ、持続可能な発展を地域のあり方の前提とし、また、そのための手段としてツーリズムを据えるという手法そのものの妥当性なのである。誰がどのようにしてツーリズムにとって有益な情報を判別しているのか、ダークツーリズムの可能性を論じる際にも、その背後に複雑に関係するアクターの行動を考慮に入れる必要がある。こうした論点を考えるきっかけとなった今回の巡検のエピソードは、地域のあり方を再考する機会を提供した点において、地理学教育における価値を多分に含んでいると考える。

最後に指摘しておかなければならないことは、ガイドの専門性に基づいた深い知見の重要性である。上記のように、地理学巡検におけるジオパーク活用の教育的意義が見出されたのは、ガイドの当該地域に対する深い理解

があったからに他ならない。ガイドを依頼した柚洞氏は、人文地理学専攻で博士号を取得し、地域調査の方法や地理学的視点の重要性を十分認識していた。こうしたガイドの学術的な知識に裏打ちされた地域の捉え方は、地理学教育において大きな価値を有するものであったと評価できる。

室戸ジオパークは、2015年度に4年に一度となる世界ジオパークネットワークの再審査において適正や活動度がチェックされる。室戸ジオパークでは今後3年間の事業計画において、日本ジオパークネットワーク、世界ジオパークネットワークによる再審査への対応が位置づけられている（第1表）。理念に沿った活動が不十分であれば認定が取り消される場合もあるため、再認定審査をクリアするための継続的な活動が求められる。こうした仕組みはまさに、実効性のある取り組みの持続可能性が重視されるがゆえの審査基準といえよう。

ジオパークの認定地域が増加している現在、ジオパークを推進するにあたって、各地域が共通して抱える課題は、ジオパークに認定され続けるための持続的なツーリズムの手法の確立であろう。それには、地域固有の自然や歴史、文化といったジオツーリズムにおけるコンテン

第1表 室戸ジオパークの今後3年間の方針

実行計画の大きな柱 ＜大項目＞	3年間の重点項目 ＜中項目＞	3年間での取り組み ＜小項目＞	事業計画 (H25～H27)
●ジオパークと暮らしていくためのまちづくり ●ジオパークを活用した産業の振興	1. 運営	主体的な体制づくり	・井戸端会議の開催 ・実行計画の進捗管理 ・次期実行計画の策定 ・日本ジオパークネットワーク、世界ジオパークネットワークによる再審査への対応 ・推進協議会による自己診断の実施
	2. ネットワーク	国際的なネットワークづくり	・他の世界ジオパークネットワーク地域との姉妹提携の締結 ・国内会議、国際会議への積極的な参加、貢献
	3. 調査研究	地質学	・黒耳海岸の野外調査、鉄丸石の研究
		地理学	・集落別聞き取り調査
		市場調査	・訪問者向け市場調査 ・市民への意識調査
	4. 教育、保護、防災	学校教育	・防災チャレンジプランの実施 ・室戸ジオパークサマースクールの実施 ・対象にあわせたジオパーク授業の開発
		自然公園法の運用と海岸清掃	・市内清掃活動 ・保護に関する将来計画の策定
	5. ジオツーリズム	おさんぽツアー	・地域を絞ったツアーづくり ・体験プログラムデータベースの作成、プログラムの開発
		情報媒体の再構成とPR戦略	・ジオサイトの見直し ・パンフレットやチラシの再検討 ・Web Siteの刷新 ・自然科学分野専門書籍の販売(有料)
		ガイド養成・室戸ジオパークマスター講座	・ガイド養成講座の実施 ・室戸ジオパークマスター講座の実施
ユニバーサル化		・バリアフリー重点サイトの選定 ・情報媒体の多元語化	
拠点施設整備		・拠点施設発着型ツアーの確立	
イベントの開催		・世界認定記念イベントの実施 ・国定公園50周年イベントの開催 ・東部地域博覧会の開催	

資料：室戸ジオパーク推進協議会（2013）：室戸ジオパークだより 2013.06, Vol. 8

ツの発見と普及、そのための人材の確保と育成、地域への経済効果の発揮が含まれる。

ジオパークの運営手法が確立されて、ジオパークの認定地域がさらに増えていけば、別の新たな課題が生じることもまた予想される。それは、ジオパーク間の観光客誘致をめぐる競合関係、地形や地質に関する学術的な価値とジオパーク委員会の認定基準に対応し続けることのできる地域との関係、地域の成立要件としての生態系からサービスを受けるといった発想の是非などである。以上のように、個別のジオパークを取り巻くローカルな視点を超えて、大局的かつ長期的な視点に立てば、地球上に展開するエコシステムに対して、われわれがどうかかわるべきなのか、いわば環境と人間との関係としてのジオパークのあり方が問われてくるのではないのだろうか。

V. おわりに

これまでのジオパークの定義をめぐる議論は、主にその推進者の立場からみた理想像を強く主張したものとなっていた。また、ジオパークの定義を満たそうとする具体的対応策は、その地理的条件によっても多様で、時とともに変化してきた。

こうしたジオパークに関連した用語の意味内容にバラつきがみられるのは、ジオパークの取り組みが開始されて間もなかったことが大きいと考えられる。そのため、ジオパークに関連する個々の論文には、論者の価値観（立ち位置）が織り込まれたものとなっている。こうした多様な価値観を内包する多義的な用語が、実際にどのように意味づけされているかを読み取る必要がある。たとえば、「観光振興（ツーリズム）」、「持続可能な開発」、「ジオ」といった用語がこれにあたる。今後、そうした用語が何を実現するための手段として言及され、従来の類似の用語と具体的に何が異なるのかを個別事例をもとに明らかにしていくことが、ジオパークのリアリティを浮かび上がらせるうえで必要である。

ジオパークをはじめ、ある運動や主張を実現する過程において、ある意味やイメージが付与されていく。「ジオパークとはこうあるべき」という主張は、ジオパークの定義をめぐる主張なのであって、表明された価値観の一つに過ぎない。ジオパークという用語に込められた意味には、個々のアクターの地域に対するまなざしが如実に反映されるのである。したがって、あらゆる利害関係者がジオパークという言葉にいかなる意味づけをし、実際にどのような活動をしているかが明らかにされる必要がある。ジオパークに込められた意味やイメージが、意図する、しないにかかわらず、誰に資するものとなっているのか、地域の住民にいかなる意味をもつのか。その土地の自然環境を理解し、生かしながら、まちづくりをす

る一連の活動（柚洞、2011）というジオパーク自体の理念と実際の活動内容が、地域にとってどのような意味をもつものかを検証するためには、その地域にかかわる多様な利害を踏まえて論じられるべきであろう。「地域」へのまなざしは一つではないからこそ、それぞれの立場からのまなざしを踏まえることが、ジオパーク間の比較や、ツーリズムにおけるジオパークの相対評価をはじめとするより大きな枠組みでの議論を展開するうえで必要である。

地域のあり方を模索するうえで欠かせない別の論点は、ジオパークのあり方を大きく規定するジオパークの審査認定基準の決定プロセスや、ジオパーク選考プロセスおよび選考委員を決める際の政治構造、他の認定団体との利害関係など、ジオパークの枠組みを提供している組織や企業とその利害関係者を取り巻く政治である。こうしたジオパークの実現に至る過程についての調査や分析が不足している現在、筆者の立場としては、ジオパークのあり方についての回答を留保せざるを得ない。今後、複数のジオパークをめぐる展開される活動プロセスそのものの分析を通じて、筆者なりに「地域」のあり方を見出すことが残された課題である。

以上は、観光、文化、政治の各系統地理学が採用してきた視点であり、ジオパークを地理学のテーマとして掲げる際の主要な論点となりうる。しかし、地理学的テーマとしての位置付けいかにかわらず、ジオパークがもつ地学、環境、防災といった教育的価値そのものは否定されるものではない。これについては、実践的研究における教育効果の検証の蓄積を通じて、より効果の高い教育方法および教材開発の手法を提示していくことが検討課題となろう。

謝辞

本稿の作成にあたって、室戸ジオパーク推進協議会の地理学術専門員である柚洞一央氏には、巡検の実施にあたって、訪問する日時および場所の設定や、当日の案内に至るまで多大なるご協力を賜りました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

文献

- 1 Eder, F. W. and Patzak, M. (2004) 'Geoparks—geological attractions: A tool for public education, recreation and sustainable economic development'. *Episodes*, 27-3: 162–164.
- 2 European Geoparks Network (2014) 'Global UNESCO Network' (http://www.europeangeoparks.org/?page_id=633)

(最終閲覧日 2014年10月27日)

- 3 荒木一視 (2012) 「学会展望 経済地理一般」人文地理 64: 218-220.
- 4 川村教一 (2014) 「ジオサイトにおける野外実習を通じた大学生の地層学習観の変化—男鹿半島・大潟ジオパークにおける小学校理科指導法実習の例—」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 36: 1-9.
- 5 小山真人・村越 真・上西智紀 (2011) : 「ジオパークのガイド養成過程における大地の成り立ちの理解とその価値への気づき—伊豆半島在住の高校生に対するケーススタディー—」静岡大学教育実践総合センター紀要 19: 11-18.
- 6 鈴木晃志郎 (2014) 「ダークツーリズムの視角からみたジオパーク, ジオツーリズムの可能性」 E-Journal GEO9-1, 73-83.
- 7 鈴木堯士・吉倉紳一編 (2012) 『最新・高知の地質 大地が動く物語』南の風社.
- 8 深見 聡 (2010) 「ジオパークとジオツーリズムの成立に関する一考察」地域総合研究 38-1: 63-72.
- 9 深見 聡・大久保守 (2014) 「ジオパーク構想の推進過程における住民意識—鹿児島県三島村を事例に—」地域環境研究 : 環境教育研究マネジメントセンター年報 6: 33-45.
- 10 村越 真・河合美保・小山真人・鈴木雄介 (2012) 「ジオパークのガイド養成講座を通じた受講者の知識と意識の変容」静岡大学教育実践総合センター紀要 20: 195-202.
- 11 室戸ジオパーク推進協議会 (2010) 『世界ジオパーク加盟申請書』室戸ジオパーク推進協議会.
- 12 目代邦康 (2014) 「特集「日本のジオパークの現状と課題」—はじめに」 E-Journal GEO9-1, 1-3.
- 13 森 正人 (2001) 「場所の真正性と神聖性—高知県室戸市の御厨人窟を事例に—」地理科学 56: 252-271.
- 14 柚洞一央 (2011) 「ジオパークを歩く (6) 室戸ジオパーク—隆起しつつける大地とともに生きる人びと—」地理 56-12: 4-9.
- 15 柚洞一央 (2014) 「室戸ジオの新たな拠点施設建設中！」 (<http://www.mgpm.sakuraweb.com/?p=5756>) (最終閲覧日 2014年11月2日)